

プログラム・ノート

解説：広瀬 大介

■ ワーグナー：楽劇《ジークフリート》より抜粋

■ ワーグナー：楽劇《神々の黄昏》より抜粋

19世紀後半のドイツ音楽史において、リヒャルト・ワーグナー（1813-1883）の《ニーベルングの指環》のような作品が生まれたのは、奇跡的な出来事であったと言わざるを得ない。ワーグナーが手がけたライフワークとして、最初期の構想（1848年）から、四部作一挙上演（1876年）まで足かけ30年近くを要した大プロジェクトであった。ワーグナーはこの四部作の執筆にあたり、北欧神話、ドイツ英雄伝説などを重層的に組み合わせ、独自の多義的な世界観を構築した。

音楽的な統一性を大事にするため、ワーグナーは一つの幕をオーケストレーションまで完全に仕上げしてから、次の幕の作曲にかかる、という手法を用いた。《ジークフリート》作曲当時、四部作上演の見込みは全く立たず、1857年から《トリスタンとイゾルデ》《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の作曲のために、《ジークフリート》は第2幕の草稿が最後まで作曲された状態で中断される。第3幕が完成したのは1871年のことだった。

ライン川の底に沈む黄金を指環にして所有したものは世界を征服できるが、女性の愛をあきらめねばならない。ニーベルング族（小人族）のアルベリヒは禁を侵して権力を手に入れる。神々の長、ヴォータンは策

略を弄してその指環を奪い取るが、アルベリヒによって指環に呪いがかけられ…。指環を巡る権力争いと、兄妹・父娘の愛の行方を追いかける四部作の前半《ラインの黄金》《ワルキューレ》に対し、後半《ジークフリート》《神々の黄昏》は、ヴォータンに代わる新時代の英雄ジークフリートの成長物語とその死、世界の没落と再生の望みが描かれる。

ワーグナーの音楽書法は、《ジークフリート》第2幕までの中断前と比べ、第3幕から豊かに、雄弁になったと言うのが、ほぼ定説となっている。今回演奏される第3幕最後の岩山の場面、主人公がヴォータンの娘ブリュンヒルデに初めて出会い、口づけで目覚めさせ、愛を育む場面では、より緊密の度合いを増した二人の対話、ハ長調で高らかに歌いあげられる幕切れなど、前2作なしには生まれ得なかった音楽上の工夫が数多く存在する。ブリュンヒルデがジークフリートに愛と不安を歌う場面のモチーフは、《ジークフリート牧歌》（1870）の冒頭主題としても有名である。

《ジークフリート》が完成した1871年に至る前の69年から、《神々の黄昏》の作曲は同時並行的に進められ、1874年11月に完成。1876年8月には、竣工成ったワーグナー

のための専用劇場で、パイロイト祝祭が開幕。ヨーロッパの王侯貴族や音楽家が集う中、《ニーベルングの指環》全4部作が華々しく初演された。

序幕で歌われるジークフリートとブリュンヒルデの二重唱。《ジークフリート》の幕切れで、この二人は異なる歌詞を歌い、同床異夢といった感もあったが、この場面での二重唱は同じ歌詞を歌う伝統的な様式へと立ち返っている。《黄昏》全体を通じ、聴き手に比較的わかりやすい、19世紀フランスのグランド・オペラの作曲書法を取って意識した側面も読み取れよう。

《葬送行進曲》では、《ワルキューレ》から登場したヴェルズング(ジークムント)に関連のあるモチーフが沈痛な雰囲気の中で総動員され、全曲中随一のクライマックスを形作る。最後の頂点は、ジークフリートの亡骸とともに自らが犠牲となることで、神々と世界を漆黒の闇から救おうとするブリュンヒルデの壮大な「アリア」。終結部、さらに全てを押し流す洪水の後で朗々と鳴り響くモチーフは、《ワルキューレ》でジークリンデが森へと逃げる直前に歌いあげた「愛の救済の動機」。ここに至るまでほとんど使われることのなかった気高い旋律が最後の最後で再び登場し、世界が愛の力で救済されるというワーグナーの思想が音楽となってあふれ出す。

以下のあらすじでは、今回の演奏で取り上げられる箇所を太字で示している。

『ジークフリート』

第1幕: 森・ミーメが棲む洞窟の中。アルバリヒの弟で鍛冶屋であるミーメは、ジークフリートを育て、巨人族ファーフナーが大蛇に変身して守る指環をジークフリートに

奪わせようとしている。ジークフリートは、父ジークムントが用いていた名剣ノートゥングをみずから鍛え、大蛇を倒す旅に出る。

第2幕: 深い森にやってきたジークフリートは、一人きりで森の小鳥の声に耳を澄ませ、角笛で仲間を呼び寄せようと吹き鳴らし、眠る大蛇を起こしてしまう。ジークフリートは大蛇の心臓に首尾よくノートゥングを突き立て、ファーフナーは息絶え、洞窟から隠れ兜と指環を入手。ミーメはジークフリートから指環をせしめるため、毒薬を飲ませようとするが、ミーメを返り討ちに。森の小鳥が、岩山の頂上で最強の勇者を待つ花嫁がいることを告げ、ジークフリートは岩山へ向かって旅に出る。

第3幕: さすらい人は今後の世界の展望を訊くため、地底深く眠るエルダに託宣を求める(歌詞は歌われない)。エルダはさすらい人の言葉を理解できずに困惑する。さすらい人は神々の世界の没落を望み、世界を統べる役割をジークフリートに譲るのだ、と宣言。エルダは、静かに地底へと戻る。さすらい人は、森の小鳥の導きでやってきたジークフリートのまえに立ちはだかり、岩山への道を塞ごうと試みるが、自身の槍をノートゥングで叩き折られ、その場を離れる。ジークフリートは燃えさかる炎をもともせず駆け上る。

岩山の頂上で、鎧に守られた女がひとり横たわり、眠っている。それが誰かを知らないジークフリートは、鎧を結ぶ鎖を剣で断ち切る。鎧をとると、横たわる人間が女性であることを知り、はじめて「怖れ」を覚える。怯えながらもその女性に口づけると、女ははじめて目を覚ます。目の前にいる勇者がジークフリートであることを知ったブリュンヒルデは、ヴォータンに願った希望(最強の勇者だけが自分に求婚できるようにする)が叶え

られたことを喜ぶ。その一方で、いまや神としての力を失い、ただの弱い女になってしまったことに不安を抱き、ジークフリートの求愛を拒もうとする。だが、次第にブリュンヒルデはジークフリートの情熱に屈し、高らかに「晴れ晴れとした死」の日を歌い上げ、彼との愛におぼれる。

『神々の黄昏』

序幕：エルダの娘である三人のノルンたちが、世界の運命を司る綱を編みながら、世の中の来し方行く末を物語るが、その綱が切れてしまう。世界の終焉を感じつつ、地下へと戻るノルンたち。岩山で迎えた夜明け。愛の時を過ごしたブリュンヒルデとジークフリート。ジークフリートは、新たな冒険へと旅立つ前に、大蛇との戦いで勝ち得た指環を贈る。互いの無事を祈りあいながら、ジークフリートは旅立ち、ライン川を船で下っていく(ジークフリートのラインの旅)。

第1幕：ギービヒ館の広間。ライン川沿いを支配する豪族ギービヒ家。同家の当主グンターは自分たちの名声を行き渡らせるために、異母弟ハーゲン(父はアルベリヒ)に助言を請う。ハーゲンは、最強の勇士ジークフリートを妹グートルーネの美貌で惑わし、炎の先に住むブリュンヒルデを連れてこさせ、グンターの妻にすることを提案する。館へと誘われ、薬酒を飲まされたジークフリートは記憶をなくし、グートルーネに夢中になり、グンターのためにブリュンヒルデを連れてくることを約束する。

岩山でひとり留守を守るブリュンヒルデ。ヴァルクューレの一人、ヴァルトラウテは、神々の窮地を救うため指環をラインの乙女に返すよう懇願するが、ブリュンヒルデは指環を手放そうとしない。入れ替わりによってきたグンター(隠れ頭巾の魔力で

姿を変えたジークフリート)に、指環を奪われてしまう。

第2幕：ギービヒ館前の川の岸辺。夜明け前、アルベリヒがハーゲンの夢枕に現れ、指環の奪還を訴える。ジークフリートが一足先に館へと帰還。次いでグンターがブリュンヒルデをつれて戻る。グートルーネと共にあり、指環をもつジークフリートの姿を見たブリュンヒルデは、炎を越えてきたのが姿を変えたジークフリートであったことを悟り、激高する。ハーゲンはブリュンヒルデから、ジークフリートの弱点は背中であるという事実を聞き出す。名誉が傷つけられたと嘆くグンターに対し、ハーゲンはジークフリートを殺害し、指環を奪ってその権力を手に入れると唆し、三者三様にジークフリートの殺害を誓う。

第3幕：ラインの乙女たちの、失われた黄金を返して欲しいという歌が響く。乙女たちに「指環の呪いで命が危ない」と脅かされたジークフリートは「脅しには屈しない」と意地を張る。ハーゲンは記憶が甦る薬酒をジークフリートに飲ませ、その真相を語らせ、弱点の背中に槍を突き立てる。ブリュンヒルデに思いを馳せながら息絶えるジークフリート。その亡骸を、家臣たちは館へと運ぶ(ジークフリートの葬送行進曲)。

ハーゲンは指環を要求し、一騎打ちの末にグンターを斃してしまふ。ブリュンヒルデはジークフリートの亡骸から指環を抜き取り、愛馬グラーネと共に館を焼く炎の中へ躍り込む。炎は勢いを増し、神々の棲まう天上のヴァルハル城にまで届き、焼け落ちる。ハーゲンはラインの流れに溺れ、指環の呪いは清められる。